第２回　旭川市民文化会館整備基本構想検討会　会議録（要旨）

会議名　　第２回　旭川市民文化会館整備基本構想検討会

開催日　　令和５年７月２６日（水）
　　午後１時３０分から午後３時００分まで

開催場所　旭川市民文化会館　第２会議室（旭川市民文化会館　２階）

出席者　　参加者　全１２名のうち１０名出席
（敬称略）　　五十嵐　真幸，上田　信津子，大口　優，大谷　薫
　　鈴川　雄太，松倉　敏郎，水野　雅文，南　裕一
　　宮田　健一，森　傑
　　事務局　３人出席
　　社会教育部長，文化ホール担当課長，市民文化会館主査
　　事務局支援　７名
　　北海道大学大学院建築計画学研究室

会議の公開非公開の別　　公開

傍聴者数　　３名

会議資料　　別紙のとおり

１　開会

２　参加者紹介

３　議事

進行役：

・　「新しい文化ホールはどんな施設が良いか」という議論に際して，多くの方，特に日頃から文化ホールに慣れ親しんでいない方は，新施設をイメージすることが難しいため，現施設を基準に考えることになる。

・ このため，バリアフリー・ユニバーサルデザインへの対応やトイレの拡充などの「現施設の課題に対する対応」が提言されがちであるが，こうした要素の多くは，現代の技術で通常の設計をすれば，そのほとんどが解決可能である。
・ 建替えについて検討する際には，「私たちの市民文化ホールは，どのような考え方で何を目指し，どこに個性を持つのか」という，いわゆる「コンセプト」の部分をしっかり考えなければ，費用面等を考えた時に優先順位を付けることができない。
・ そこで，今回は個性的なコンセプトを持つ事例を事務局から紹介いただき，文化ホールに対する視野を広げた上で，旭川市として目指すべき施設の姿を考えていきたい。

３―（１）　先行事例について

事務局：
・ 近年建設された文化ホール機能を持つ施設から，３施設をご紹介させていただく。
・ 説明については，基本構想策定に係る業務支援を担当している北海道大学大学院建築計画学研究室の皆様から行う。

資料１及び資料２に基づき説明
□ 枚方市総合文化芸術センター（大阪府枚方市）
・ 1971 年竣工の市民会館が，建物・設備の老朽化やホールの音響性能や遮音性，バリアフリーなど現代的要求を満たしていない部分を多く抱えていたため，その建替えとして完成した施設であり，建設に至る背景が旭川市と似ている。
・ 大阪府枚方市は大阪市・京都市へそれぞれ電車で 30 分程度の場所に位置する関西有数のベッドタウン。人口約 39 万人，財政規模約 1,545 億円と旭川市に近い。
・ 施設の竣工は 2021 年であり，建設費は約 118 億円。
・ 運営は指定管理によって行われている
・ 「文化芸術を活用した，まちづくりの拠点となる公共施設」と位置付けられている。
・ 大ホール，小ホール，多目的ホールの３ホールを持ち，メインとなる大ホールは様々な文化芸術公演に対応する高機能ホール。３層構造で 1,468 席を有し，１階席のみ使用し 836 席の中ホールとしても使用可能。
・ イベントホールは平土間のホールで，小規模演劇やミニコンサートなど幅広い用途に対応可能。パントリーや専用の搬入スペースを備えており，飲食を伴うレセプションやパーティ等への対応も可能である。
・ 建物の外部空間には緑を多く配置し，市民の憩いの空間となっている。また，施設前広場にはテントも設営可能で，ホールと連動したイベントの開催も想定されている。
・ 他には演劇や発表会等に利用される約 300 席の小ホール，最大天井高 3.5mを確保し大型絵画も展示することのできる展示空間，建物内外をつなぐ開かれたエントランスロビーなどがある。

□ 水戸市民会館（茨城県水戸市）

・ 文化芸術だけでなく，コンベンションの開催を前提とした多目的ホールであることが特徴の施設。
・ 茨城県水戸市の人口は約 26 万人，財政規模は約 1,174 億円。
・ 令和５年７月２日に開館したばかりの施設であり，総事業費は約 192 億円。
・ ３層構造で 2,000 席の大ホール，192 席の小ホール，482 席の多目的ホールがある。
・ 駅から徒歩 20 分程度，水戸芸術館と百貨店の間に位置しており，両施設と連携しつつ「中心市街地の活性化を促す市民の交流拠点」となることが期待されている。
・ 大ホールは県内最大の 2,000 席を有し，３層構造のうち１階席のみ，２階席までなど催事に応じて臨機応変に使用可能。市民の芸術活動に加え，コンサートやイベントの誘致等を計画している。
・ 施設のエントランスには木組みで設計された屋内空間「やぐら広場」があり，マルシェの販売会やスポーツ観戦など，最大で 500 人規模のイベントが開催可能。また２階には日常的に市民が利用可能なラウンジギャラリーがあり，イベントがない時にも，気軽に立ち寄ることができる施設を目指している。
・ 全国規模のコンベンション誘致のため，3,000 人規模のコンベンション開催が可能な機能を持つ。メイン会場となるホールだけでなく，展示会場や分科会の開催に十分な広さと数を備えた展示室・会議室を持ち，各室に机や椅子を備えている。

□ 由利本荘市文化交流館カダーレ（秋田県由利本荘市）

・ 劇場を基本としながら，多彩な演目に対応できる空間可変機構を備えた超多目的ホールが特徴的な施設。
・ 由利本荘市は秋田県南西部に位置し，人口約７万人，財政規模は約 474 億円と，本日紹介する事例の中では最も小規模な自治体。
・ 施設は 2011 年竣工，建設費は東日本大震災後かつアベノミクス開始の間に竣工したことも関係し，現在の建設費用の相場からみると破格の約 60 億円で完成している。
・ 大ホールは２層構造の 1,010 席で，１階席が可動席 536 席，２階席が固定席 574 席。
・ 徒歩 10 分圏内に駅や市役所がある市中心部に位置し，周辺には住宅と商業施設が集まり，コンパクトな範囲で暮らしが完結する便利な環境になっている。
・ 「まちの公共機能を集約した複合施設」というコンセプトのとおり，市内に点在していた様々な公共施設を集約した複合施設であり，日本初の可変型機構を持つ大ホール，蛇行したストリート空間が特徴的な建築となっている。
・ 「大ホール」「図書館」「交流活動施設」「教育学習施設」「店舗施設」「わいわいストリート」と，大分して６つのゾーンで構成されている。交流活動施設には市民活動室やギャラリーがあり，教育学習施設にはプラネタリウムや学習室が入っている。一度の来館で多岐にわたる体験や複数の催しへの参加が可能となっているため，あらゆる年齢層の人々が一日ゆっくりと利用可能。

・ 施設内には「わいわいストリート」という建物の中央を縦貫する通路があり，ここを通って全ての施設を利用することができるよう設計されており，一直線ではない凸凹した通路は，散策路のような感覚をもたらす。
・ 大ホールは日本初の可変型多機能ホールであり，１階席に可動席でありながら固定席にも等しい音響性能開発を行ったことで，音楽・演劇・コンベンションと多くの催事に使用可能。座席を床下へと収納することでフラットな空間へ変化できるようになっており，全席を展開すると 1,110 席，１階席を平土間形式とし２階席のみとする場合は 574 席が使用できる。
・ 大ホールを平土間形式とし，隣接した通路や壁を全て取り払い空間を連結することで，全長 135mのトンネル状のフラットな空間を形成可能。フェスティバルの開催や企業の忘年会，行政の説明会など様々な催事に利用できる。

進行役：

□ 枚方市文化総合芸術センターについて補足

・ 複数のホールを持つ文化ホールを現代の技術で合理的に造った場合の目安として，良い参考事例である。
・ 間延びせずコンパクトに造られた施設であるが，現旭川市民文化会館と比べても施設面積は大きく変わらないことから，現代的要求を満たす建物として建築した場合，面積は今よりも大きくなりがちであることが分かる。

□ 水戸市民会館及び由利本荘市文化交流館カダーレについて補足

・ 劇場・ホールは，舞台上に照明・音響・幕といった「吊り物」を吊るため，建物の中にフライタワーと呼ばれる天井高の高い部分ができる。カダーレはフライタワーが飛び出た形であるのに対し，水戸市民会館の断面図を見ると，フライタワーの周りに会議室や展示室などコンベンション機能に関する諸室が配置されているため，建物全体のボリュームが大きくなっている。
・ 前回の議論にあった要素を全て取り込んでいくと，水戸市民会館が比較的近い事例となる。大ホールはイベントや興行を想定すると視野に入ってくる 2,000 席を有し，また３層構造である点は，席数を減らして使用できるなど運用上のメリットもある。
・ ホール等の主要な機能以外に床面積を大きく割り当てるのが，近年の文化ホールの特徴である。水戸市民会館もホール以外に面積を大きく割いており，エントランスロビーでも催事を行える構造にすることで，ふらっと立ち寄った人が関心を持ってくれるよう促している。
・ 水戸市民会館の事例では延床面積が約 23,000 ㎡，建設費ではなく総事業費が約 190 億円である。

３―（２）　質疑応答及び意見交換

参加者：

・　外観について，水戸市民会館は全てガラス張り，カダーレはガラス張りかつ上の方はコンクリートという印象であるが，そのような認識で良いか。

事務局：

・　そのような認識で問題ない。

進行役：

・　文化ホールは音響面などを考慮すると，基本的に窓などの開口部を設けられない。水戸市民会館はホール以外の機能を周囲に配置しているので，ガラス張りとなっている。

参加者：

・　紹介事例をみると建設用地が広く必要であると感じた。
・　本検討会での議論はどの程度反映されるのか。この場で議論を重ねても，反映されない可能性もあるのではないか。敷地に関しても確定ではないのだろうが，総合庁舎跡地を前提とするような雰囲気が感じられる。

進行役：

・　検討会は意思決定機関ではなく，文化会館の望ましい在り方の見解をまとめる場である。それを受けて行政側が決定するが，検討会での見解が全く汲まれないということはないと考えられる。ただし，政策上，財務上及び法律上の観点から，できること・できないことを行政側が精査する形になると思われる。

事務局：

・　本検討会で市民の皆様からいただいた意見を集約し，市の検討に反映させていただく形となるが，現市民文化会館の建替えである以上，基本的に現在のホールを使用いただいている催事は，新設の施設でも開催できるようにする必要があると考えている。
・　第１回会議冒頭で市長の挨拶でコンベンションという言葉があったこと，そして音楽専用ホールとしてはクリスタルホールがあることから，新設の文化会館では，複合化，多目的・多用途なホールが視野に入る。その点はこの場の皆様にも御理解いただいた上で，市としても検討を進めたい。
・　敷地に関しては，現時点で確定していないが，前回の市議会での質疑において，総合庁舎跡地が候補の一つである旨を答弁しており，候補の一つとして視野に入ってくる。

進行役：

- 敷地に関しては，水戸市民会館は敷地の境界ぎりぎりまで土地を使って建設しており，敷地に余裕がない中で建設した場合をイメージするための参考事例にもなる。
- ただし，単純に旭川市も水戸市と同様に考えれば良いということではなく，例えば費用面について，水戸市民会館は総事業費が約 190 億円であり，旭川市で同程度の規模となると現実的なのかという点も考える必要がある。
- 敷地についても「文化ホールとしての視点から望ましい場所」「コンベンションの視点から考えた場合に望ましい場所」「ふらっと日常的に立ち寄ることのできる場所」など，様々な視点から考える必要がある。

参加者：

- 水戸市民会館は 3,000 人規模のコンベンションが可能であり良いと思うが，全国的にコンベンションの誘致合戦をしている中で，開催可否を分ける要素として，宿泊施設の数が挙げられる。
- 北海道において，札幌市の次に宿泊施設が充実しているのは旭川市であり，全国規模のイベントやコンベンションを誘致できれば，地域活性化にもつながる。

進行役：

- 宿泊機能に関して，仮に水戸市民会館と同規模の施設ができたとして，現時点でも受容可能なキャパシティを有しているのか，あるいは新施設が建設されることにより宿泊機能が今後さらに増加することを見込んでいるのか。

参加者：

- 宿泊機能を持つ施設の部屋数は，市内には約 5,000～7,000 程度あるが，従事する人材が不足している面はある。
- コンベンション等で多数の参加者が宿泊する際，宴会や懇親会等の開催が見込まれる。旭川市内には大きなホテルなど開催可能な施設があり，その点で有利と考えている。

参加者：

- 現在の旭川市民文化会館では，大きなイベントがあった場合，冬季でも屋外で並ばなくてはならないが，水戸市民会館であれば屋内で待つことができ，とても良いと感じた。

参加者：

- 水戸芸術館という音楽において非常に有名なホールが近隣にあるが，この水戸芸術館と水戸市民会館はコンセプトが重複しないよう設計されていると考えて良いか。

事務局：

・　水戸市民会館は多目的でコンベンション寄りの施設として位置づけられている一方，水戸芸術館はコンサート型の音楽に特化した芸術ホールであり，差別化が図られていると認識している。

参加者：

・　水戸市民会館の方でも，例えばフルオーケストラのコンサートというようなものができる音響設備は備えているのか。

事務局：

・　大ホールの音響反射板など，音響設備を高機能に整備しているため，大規模なコンサート等にも対応している。

参加者：

・　音楽面が高機能なホールであることを希望するが，コンベンション的な機能を全く考えずに建設することは，旭川市の状況として現実的ではないと思うので，そのバランスをどのように取っていくのかが課題と感じている。
・　以前，平塚市のホールを使用したが，そちらもコンパクトなホールでありつつ，水戸市民会館のように，様々なイベント等に使用可能な機能を備えていた。現代においてホールというものが進化していることを，本日改めて実感することができた。

参加者：

・　３つのホールに共通の質問として，新たな価値が施設についたことで稼働率の向上や海外への可能性，音楽の専門的な評価など，建設後のポジティブな声などはあるのか。

事務局：

・　水戸市民会館について今後視察予定であり，視察を踏まえて回答させていただく。

進行役：

・　一般論として，多くの地方都市に「施設の老朽化」と「人口減少に伴う公共施設の余剰」という課題があり，それらの施設機能を集約複合化する場合が多いが，稼働率に関しては，ホール単体では毎日イベントがあることはないため，どのように建てても向上しない。そこで，図書館やギャラリーなど，日常的に使用する機能を複合化することで稼働率の向上及び会議室等の様々な室の共用による面積効率向上を狙うことになる。そのような前提も踏まえて，稼働率といった数値だけではなく，日常的な利用の実態等を調査にて資料収集していただきたい。

参加者：

- ステージを中心とした劇場型施設が紹介されたが，事例紹介の中にあった芸術ギャラリーやラウンジギャラリーがどれくらいの面積を有しているのかが気になる。
- 現在の旭川市民文化会館展示室にて，旭川市の美術団体３団体が連携し公募展を開催しており，今回の紹介事例にあった展示機能を持つ面積では，我々の望む規模には不十分であると感じた。
- 敷地に関して，建物だけ造れば良いというわけではなく，文化施設にふさわしい周辺環境をたっぷりと確保した場所であることが望ましいが，総合庁舎跡地では狭すぎてふさわしくないと思う。
- 劇場型ホールは建てて良いと思う。私の願いは美術館的な多目的な施設を別に建ててほしい。

進行役：

- 美術館の建設は，本会議で扱うものではないが，美術館や劇場，コンベンションは本来異なる機能なので，一つの建物で全てをカバーすることが難しいというのは確かであるが，複合化というのはそれをポジティブに捉え，相乗効果をもたらすことを狙いとしている。だからこそ「この事業で何に中心を置き，どんなコンセプトを明確に持つのか」ということを議論する必要があり，本検討会はそれを考える会である。
- 自然に囲まれてのびのびとした場所で美術品を鑑賞したいというニーズがあるのと同じくらい，利便性の良いところで気が向いた時にふらっと立ち寄れるようであってほしいという声もあると思う。そうした思いを踏まえてまずはコンセプトを定め，そこに合致する敷地であるか，また都市計画法など行政的な面で可能であるかといった視点から考えていく必要がある。今後の会議にて，資料を提示し議論することになると思うので，本日の会議において立地の是非等は保留とさせていただきたい。
- 展示室に関しては，枚方市総合文化芸術センターの事例では，エントランスロビーと展示室が接続しており，目的がなく訪れた方であっても，ふらっと立ち寄ることができる構成となっている。他施設でもギャラリーを整備する傾向にあり，現代的なギャラリーはどのような形で活用しているのかという点も，今後参考にしていけると良い。

参加者：

- 印象に残っているのは，枚方市総合文化芸術センターや由利本荘市文化交流館カダーレの屋外スペースであり，屋外スペースにゆとりがあると非常に入りやすい。水戸市民会館は駐車場が地下にあり，地上に停める場所がないというのは懸念点になる。
- キーワードマップには，「相互性」というものもほしい。旭川市には芸術分野の有識者が多数いることもあり，相互につなげるものとして市民文化会館が位置付けられると良いと思う。

・ カダーレが「交流」という言葉を施設名に冠しており，コンセプトが明確に押し出されていると感じた。
・ 本日紹介のあった３事例では，記載されているコンセプトや具体的な機能をどのような経緯で決定したのか，分かる範囲で教えてほしい。

事務局：
・ カダーレに関しては，検討段階において市民参画を大事にしており，ソフト面・ハード面が一体的に計画されている。また，公共施設の老朽化に伴う公共機能の集約化というニーズが反映されたものであると認識している。

進行役：
・ 本検討会は意思決定機関ではないが，目指すべき路線や大事にしたい点などを現実的な条件と兼ね合わせながらコンセプトとして集約し，自治体はそうした意見を参考に「基本構想」を策定する。現代において施設建設等を検討する際，旭川市に限らずどの自治体でもほぼ必ず，本検討会のような段階を踏んでいる。
・ 資料３のキーワードマップは前回会議での発言内容を整理してグルーピングしたものであり，コンセプトづくりの下地となる資料である。今後，検討会を行う度に更新していく。

参加者：
・ 水戸市民会館の「多様な人々の交流」というコンセプトに共感した。具体的な施設設備の面でも，バリアフリートイレが男性トイレ側と女性トイレ側，それぞれに設置されているが，こうしたニーズは多いので，非常に良い配慮であると感じた。
・ 立地や複合施設としての在り方を考えると，「わざわざ足を運ぶ」ではなく，「何かの『ついで』に見に行く」ことができる点は，非常に魅力的であると感じる。交通の便が悪い等の理由で，なかなか外に出られないという高齢者が多くいる一方，「買い物のついでにパラスポーツを体験できる」といった取組が喜ばれている。先程，美術の展示に関する意見もあったが，例えば自分の子供が描いた絵がスーパーに貼られていれば，買物のついでに見に行こうと考えるように，何かの「ついで」で気軽に立ち寄ることができる多用途性や立地というのは，市民としてとても嬉しい。
・ ホール内では自分の座席スペースがあるため苦にならないと思うが，ホールから出た時にオープンスペースが狭い施設では，車椅子やベビーカーで視点が低い方は圧迫感を感じると思う。水戸市民会館のようなパブリックスペースが確保されているのは嬉しい。
・ 駐車場に関しては，仮に総合庁舎跡地に整備するのであれば，新施設単独で完結するのではなく，周辺と連携しながら車椅子の方でも使いやすい形で整備できればと思う。

進行役：

- 私自身も，過去に展示専用の施設に行って見終わった後，さあどうしようかと悩んだ経験がある。メインの目的の前後，施設内又は施設周辺で，連続性を持って楽しむことができる要素があるというのは大事なことだと共感した。

□ 敷地に関する補足

- ここまでの発言から，多くの方が敷地に関心を持っていることと思う。敷地には，「建物」と「建物以外のスペース」があるが，建物以外のスペースが大事であるという指摘のとおり，文化芸術鑑賞の建物に関しては美術鑑賞や音楽鑑賞の前後の感動に浸る時間を過ごせるような，あるいはエントランスホールまでの経路で気分を高揚させられるような建物以外のスペース（パブリックスペース／オープンスペース）が重要であるということは，建築の計画において古くから重要視されている。
- 一方で，北海道など積雪寒冷地では，冬季に屋外のパブリックスペースが機能しなくなることから，屋内型パブリックスペースが注目されている。屋内であれば冬季に限らず，暑いから涼んでいこうとか，雨が降ったから雨宿りしていこうとか，年間を通して気軽に立ち寄る機会を増やすことができる。そうした視点から見ると，水戸市民会館は「敷地いっぱいに建てた窮屈な建物」というより，「豊富な屋内型広場を設けた建物」になる。こうした積極的余白を考えるというのは，重要な価値を持つ。

参加者：

- 歩ける人は余白部分を散策しながら楽しむことができるが，一方で身体に不自由さを抱えている人にとっては動線を短くし，できるだけ動きたくないというニーズがあると思うので，そうしたニーズに対応可能な入口を一つ作っておくと良いのではないか。

進行役：

- エレベーターで移動することができるため，動線を短くするには積層型とするのが合理的である。一方で平屋のような建物だと，ギャラリーや図書スペースを経由することによって，そこで行われている活動を知る機会を得ることができる。積層型と平屋型はそれぞれ良い面と悪い面がある。

参加者：

- 現実的に考えてコンベンションは外せないと思うが，少なくとも大ホールは音響にこだわってほしい。音楽特化型のホールとしてクリスタルホールがあると思われるかもしれないが，クリスタルホールも築 30 年を迎え，老朽化してきている。仮に文化会館の竣工までに 10 年かかるとしたら，その頃にはクリスタルホールも築 40 年を迎え，今度はそちらの整備も考える必要が出てくると思う。

進行役：

- 私自身も「コンベンションセンターに文化ホールが付加される」ではなく，「文化ホールにコンベンションを担える機能を盛り込む」という形であると思っており，とりあえず演奏できれば良い，という話にはならないものと認識している。この点は今後の検討に際して，重視すべき事項の一つになると思う。

参加者：

- 前回の会議で進行役が「多目的が無目的になってはいけない」という話をされたことが印象に残っている。本検討会は意思決定機関ではないが，行政側には多方面に妥協した結果，多目的ホールという名の無目的ホールを整備するようなことがないよう，念押ししてお願いしたい。

進行役：

- そうした事態を防ぐことが，コンセプトを定める目的の一つであるので，次回以降の会議で詰めていきたい。

参加者：

- 現在の旭川市の状況をもとに考えてしまうが，人口や年齢構成など，今後どういう状況になっていくのかを見越して考える必要があるのではないか。また，現在の交通網を大幅に変えればどこに建てても良いとも思う。
- 現状を見ると，劇場型のホールに展示室が間借りしている感じになる。劇場型のホールと展示ギャラリーを同等の位置付けで考えてほしい。

進行役：

- 複合化にあたって，どの機能を主軸にしていくかという議論は絶えず起こる。この点はそれぞれの機能について，類似施設との役割分担や位置付け等も意識しながら判断していく必要がある。
- 将来を見越した話としては，今後も人口減少が進むことを考えると，そもそも多額の費用をかけて大丈夫なのか，先の世代に何を残せるのか等を考えることは，根本的な部分の議論になる。
- また立地に関しては，理論的な観点からいうと，人口減少への対応策として，街全体をコンパクトに集約することで，除雪や交通の距離を短縮し，コストを圧縮するという考え方になるため，中心部に持ってくるという考え方になる。

- 本日は，ここまで具体的事例をもとに感想・意見を出していただいたが，それらの内容を事務局がキーワードマップに追加し，密度を上げていく。
- 次回以降は，事例にあったコンセプト・テーマについて議論していくことになる。

・　どの自治体のどの検討会でも，全員が同じ方向を向くということはない。様々な意見があるので衝突することは多々あるが，異なる意見も理解しながら，「それが妥当なのではないか」という落としどころまで，一緒に意見交換を進めていきたい。

4　閉会